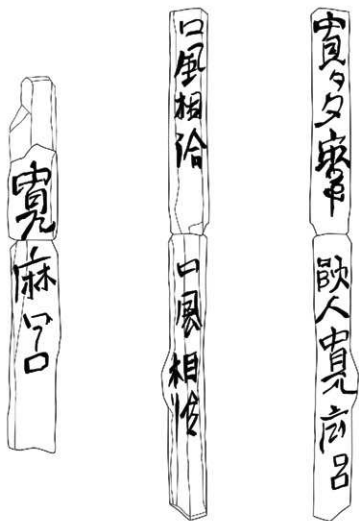


平安京右京一条三坊十三町跡



2025 年 7 月

株式会社 地域文化財研究所

例 言

1. 本書は京都市右京区花園藪ノ下町9番地のマンション建設工事に伴い、開発原因者より株式会社地域文化財研究所が委託を受け実施した発掘調査の報告書である（京都市番号：21H320）。
2. 調査面積は176.5㎡である。
3. 調査期間は令和4年2月21日から同年3月17日である。
4. 発掘調査は影山美智吾が担当し、市田英介・江崎周二郎が補佐した。現地作業については有限会社ワーク、測量については株式会社埋文アシストに協力を得た。
5. 本調査の検証審査委員は龍谷大学教授 國下多美樹氏、立命館大学教授 木立雅朗氏である。
6. 土色は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帳』に準じた。
7. 本文・挿図における方位・座標は世界測地系 平面直角座標系VIを使用し、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）を使用した。
8. 本書の執筆及び編集は、福永信雄・市田の指導のもと影山・江崎が行った。
9. 本書掲載の遺物整理作業は、松田直子・須藤歩・阪田恭子・井藤美由・藤代陸が行った。
10. 本調査に関わる資料は、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。
11. 出土遺物における墨書の分析・釈読・所見・赤外線撮影については、独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 文化遺産部歴史史料研究室のご協力を賜り、写真の提供を受けた。
12. 発掘調査・整理作業に際し、下記の方々にご指導・ご協力を賜った。記して謝意を表します。
赤松佳奈、網伸也、馬瀬智光、浦蓉子、小田裕樹、垣中健志、木立雅朗、國下多美樹、桑田訓也、黒須亜希子、神野恵、中村一郎、馬場基、山本崇、山本祥隆（敬称省略・五十音順）
13. 本書作成にあたり、以下の文献を参考とした。

石井清司・市川創編 2020『平安期緑釉陶器・緑釉瓦生産の多分野協働型研究』公益財団法人古代学協会

大阪府教育委員会 1983『昭和57年度 はさみ山遺跡発掘調査概要』

京都市埋蔵文化財研究所 2012『平安京右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-4

京都市埋蔵文化財研究所 2013『平安京右京二条三坊十五町跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-6

小櫛山一良他 1999『Ⅱ平安宮・京跡』平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要 京都市埋蔵文化財研究所
小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年研究—日本律令の土器様式の成立と展開、7～19世紀—』京都編纂工房

高橋照彦 1995『平安期緑釉陶器生産の展開と終焉』『国立歴史民俗博物館研究報告』60

高橋照彦 2014『日本古代三彩・緑釉陶器の研究』京都大学大学院文学研究科考古学専攻博士論文

奈良国立文化財研究所編『平城宮本簡5』奈良国立文化財研究所史料 42

花園大学考古学研究室 1984『花大考研報告4 平安京右京2条3坊9・10町』花園大学構内調査報告Ⅰ

花園大学考古学研究室 1993『花大考研報告8 平安京右京2条3坊9・10町』花園大学構内調査報告4

花園大学考古学研究室 1998『花大考研報告11 京都市右京区花園春日町・八ツ口町 平安京右京2条3坊15・16町』花園大学構内調査報告5

花園大学考古学研究室 1998『花大考研報告12 平安京右京2条3坊9町：京都市中京区西ノ京壺の内町（付 妙心寺庫裡修理に伴う事前調査）』花園大学構内調査報告6

平尾政幸 2019『土師器再考』『洛史 研究紀要 第12号』研究紀要

枚方市文化財調査委員会 2006『禁野本町遺跡3』枚方市文化財調査報告 49

本弥八郎 1989『3 平安京左京一条三坊1』『昭和61年度 京都市埋蔵文化財調査概要』京都市埋蔵文化財研究所

本文目次

I	はじめに	1
II	遺構	3
III	遺物	10
IV	まとめ	22

図版目次

図版 1	遺構 1. 調査前風景(西から) 2. 西部遺構検出状況(西から) 3. 東部遺構検出状況(東から)
図版 2	遺構 1. 櫓 1 検出状況(東から) 2. 櫓 2・3 検出状況(東から)
図版 3	遺構 1. SP15 検出状況(南から) 2. SP15 断面(北から) 3. SP16 検出状況(南から) 4. SP16 断面(南から) 5. SD02 検出状況(南から)
図版 4	遺構 1. SP50 検出状況(南から) 2. SP50 断面(南から) 3. SP62 検出状況(北から) 4. SP62 断面(北から) 5. SP64・73 検出状況(北から) 6. SP80 土師器出土状況(北から) 7. SE61 検出状況(西から) 8. SE61 断面(北から)
図版 5	遺構 1. 西部完掘状況(西から) 2. 東部完掘状況(東から) 3. 東端完掘状況(東から)
図版 6	遺構 1. 北壁土層断面(南から) 2. 西壁土層断面(東から) 3. 西端拡張部(北から)
図版 7	遺物 SD02・SP56・SE61 出土 土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦
図版 8	遺物 SE61 出土 土師器
図版 9	遺物 SE61 出土 土師器・墨書土器
図版 10	遺物 SE61 出土 須恵器・黒色土器
図版 11	遺物 SE61 出土 緑釉陶器・灰釉陶器
図版 12	遺物 SE61 出土 木簡・埴・土馬・承和昌宝
図版 13	遺物 SE61 出土 木製品・桃の種
図版 14	遺物 SP73・SP80 出土 土師器

表目次

表 1	既往の調査一覧	2
表 2	検出遺構一覧	8

本文目次

I	はじめに	1
II	遺構	3
III	遺物	10
IV	まとめ	22

図版目次

図版 1	遺構	1. 調査前風景(西から) 2. 西部遺構検出状況(西から) 3. 東部遺構検出状況(東から)
図版 2	遺構	1. 柵 1 検出状況(東から) 2. 柵 2・3 検出状況(東から)
図版 3	遺構	1. SP15 検出状況(南から) 2. SP15 断面(北から) 3. SP16 検出状況(南から) 4. SP16 断面(南から) 5. SD02 検出状況(南から)
図版 4	遺構	1. SP50 検出状況(南から) 2. SP50 断面(南から) 3. SP62 検出状況(北から) 4. SP62 断面(北から) 5. SP64・73 検出状況(北から) 6. SP80 土師器出土状況(北から) 7. SE61 検出状況(西から) 8. SE61 断面(北から)
図版 5	遺構	1. 西部完掘状況(西から) 2. 東部完掘状況(東から) 3. 東端完掘状況(東から)
図版 6	遺構	1. 北壁土層断面(南から) 2. 西壁土層断面(東から) 3. 西端拡張部(北から)
図版 7	遺物	SD02・SP56・SE61 出土 土師器・須恵器・灰軸陶器・瓦
図版 8	遺物	SE61 出土 土師器
図版 9	遺物	SE61 出土 土師器・墨書土器
図版 10	遺物	SE61 出土 須恵器・黒色土器
図版 11	遺物	SE61 出土 緑軸陶器・灰軸陶器
図版 12	遺物	SE61 出土 木簡・埴・土馬・承和昌宝
図版 13	遺物	SE61 出土 木製品・桃の種
図版 14	遺物	SP73・SP80 出土 土師器

表目次

表 1	既往の調査一覧	2
表 2	検出遺構一覧	8

挿 図 目 次

図 1	本調査及び既往の調査位置	2
図 2	北・西壁土層断面図	4
図 3	調査区平面図	5
図 4	柵列平・断面図	6
図 5	SE61 平・断面図	7
図 6	土師器埋納遺構平・断面図	7
図 7	恵止利小路西築地内溝・柵列ビット出土遺物	10
図 8	SE61 出土土師器	13
図 9	SE61 出土緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・須恵器	14
図 10	SE61 出土埴・瓦	16
図 11	SE61 出土木簡	17
図 12	SE61 出土木製品・土馬・承和昌宝	18
図 13	土師器埋納遺構出土土師器	20
図 14	SP73 土師器出土状況	21



遺構検出作業風景

I はじめに

1. 調査に至る経過

調査地は京都市右京区花園藪ノ下町9番地に所在する。平安京の右京一条三坊十三町にあたる地点で、調査区東端には恵止利小路西築地心の推定ラインが通る。周辺の調査では、平安時代前期の建物跡をはじめとした遺構・遺物が検出されている（図1・表1）。

当地におけるマンション建設に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、文化財保護課）による試掘調査が行われた結果、GL-0.5mの地山上面で4基の柱穴を検出した。このため建設範囲の内、遺構が保護されず破壊される部分を対象として発掘調査の実施が指導された。調査は開発原因者からの委託を受け、株式会社地域文化財研究所が実施した。

2. 位置と環境（図1・表1）

調査地は北側から南西方向に流れる天神川・宇多川により形成された扇状地に位置する。北に高く、南に向かってなだらかに低くなる。西部はやや高く東部は谷状に窪む。

調査地東側に位置する「西小路通」は、平安京における「恵止利小路」にあたり、現行政区画における右京区・中京区の境界であるが、江戸時代では木辻村と西ノ京村の境界であった事が知られている。『延喜式』に記される恵止利小路の規模は、路面2丈3尺（約6.9m）、東西両側溝3尺（0.9m）、犬走3尺（0.9m）であり総幅は4丈（約12m）である。

平安時代前期には小路沿いに荘園開発が進み、小康親王が開発した「侍従池寮」が作られたが、中期以降は左京に比して低地であった事で衰退が進み、中世には耕作地として利用されていた。

調査地周辺ではこれまでに公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、花園大学考古学研究室、関西文化財調査会が発掘調査を行っており、恵止利小路西側溝や築地内溝の他、居住域では平安時代前期～中期に属する建物跡や櫓列、井戸等が検出されている。

3. 調査経過

調査範囲は、開発対象地東半部に東西長17m、南北長9.5mの長方形と、その東北隅で東西長5m、南北長3mを掘削するL字形で設定した。試掘結果にもとづき、機械掘削によりGL-0.5mまで盛土を除去し、T.P.43.2～43.5mの地山上面で遺構を検出した。機械掘削時、遺構検出時、遺構完掘時に文化財保護課による検査、指導を受けた。また、検証審査委員による調査指導を受けた。

調査は令和4年2月21日から開始し、同年3月17日に終了した。以下、その経過を記す。

2月21日（月）調査範囲設定、機械掘削開始。文化財保護課臨検。2月22日（火）機械掘削終了、遺構検出。3月2日（水）遺構検出写真撮影。文化財保護課臨検。3月4日（金）遺構掘削。検証審査委員の國下氏、木立氏より指導を受ける。3月10日（木）遺構完掘撮影のための清掃。調査区北東隅で井戸1/4を検出。3月11日（金）遺構完掘写真撮影、測量。遺構掘削作業終了。文化財保護課臨検。調査区の南西隅を拡張し柱穴列の続きを確認する事、調査区の南東隅を拡張し井戸の範囲を確認して掘削を行うよう指導を受ける。3月16日（水）指導を受けた2カ所の拡張を行い、柱穴が延伸しない事及び井戸の範囲を確認。井戸を裁ち割り、平面図・断面図を作成。3月17日（木）調査区の埋め戻しを行い調査終了。

表 1 既往の調査一覧

No.	調査位置	調査機関	掲載文献
1	右京一条三坊、二条二・三坊	(公財) 京都市埋蔵文化財研究所	『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』1999
2	右京一条三坊十三町・二条二坊十六町	(公財) 京都市埋蔵文化財研究所	『平安京右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡』2012
3	右京二条三坊十六町	花園大学考古学研究室	『花大考研報告 11 花園大学構内調査報告V』1998
4	右京二条三坊九町	花園大学考古学研究室	『花大考研報告 4 花園大学構内調査報告 I』1984
5	右京二条三坊九町	花園大学考古学研究室	『花大考研報告 8 花園大学構内調査報告IV』1993
6	右京二条三坊九町	花園大学考古学研究室	『花大考研報告 12 花園大学構内調査報告VI』1998
7	右京二条三坊十五・十六町	(公財) 京都市埋蔵文化財研究所	『平安京右京二条三坊十五町・十六町跡』2013
8	右京一条三坊十二町	関西文化財調査会	『平安京右京一条三坊九町発掘調査報告』1997
9	右京二条四坊一町	(公財) 京都市埋蔵文化財研究所	『京都市内遺跡発掘調査報告 平成24年度』2013

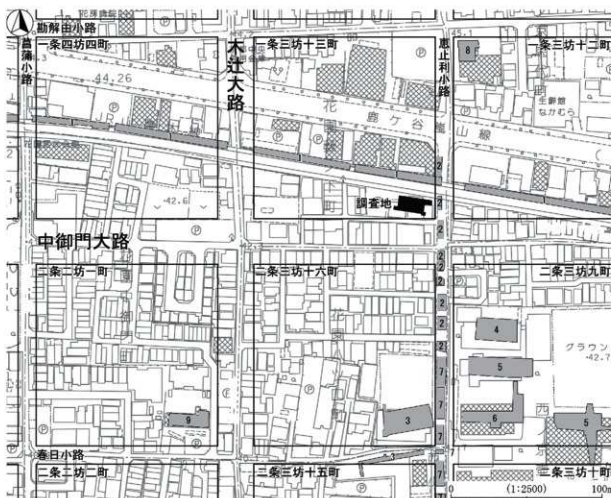


図 1 本調査及び既往の調査位置

Ⅱ 遺構

1. 基本層序（図2）

第1層 5Y5/2 灰オリーブ色シルト。礫を多く含む（地山）。

第2層 10YR8/4 浅黄橙色細粒砂混じり粘質シルト（地山）。

表土の層厚は約0.5mだが、地山を部分的に深く削り込む状況であった。また地山は西から東に向けて傾斜している状態で、第1層は調査区南側でのみ認められた。

2. 遺構（図2～6・表2）

遺構は平安時代前期の恵止利小路西築地内溝・柵列・井戸、中期前葉の土師器埋納遺構の他、溝・ピット・土坑を検出した。検出した遺構の総数は82基で、その内訳は溝11条・ピット63基・土坑7基・井戸1基である。以下、主要な遺構を報告し、その他の遺構は表2により概要を記す。

平安時代前期

恵止利小路西築地内溝・柵・井戸を検出した。機能時期は9世紀前半～中頃と考えられる。

恵止利小路西築地内溝（SD02）

調査区東端で検出した南北方向の溝である。断面形は皿形を呈し、検出最大幅約1.96m、深さ約0.25mを測る。恵止利小路西築地心推定ラインから溝の中心まで約2.9mを測る。垂直に切り合うSD03は雨落溝と考えられる。埋土から土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦が出土した。

柵列

調査区東部において南北方向1条、中部から西部にかけて東西方向2条の、合計3条の柵列を検出した。

調査地ではピットが比較的多く検出されているが、その中でも堀方が一辺0.4～0.8m程度を測る隅丸方形のピットを柵の柱穴とした。そのため柵列を構成するものとして含めていないが、平断面形や規模、出土遺物が類似するピットも関連の可能性が考えられる遺構とした。

柵1（SP10～12・62）

調査区東部で検出した、南北方向の柱穴列である。検出した柱穴数は4基で、柱間隔は北から3.4m、2.5m、2.1mと不規則である。それぞれ堀方の平面形は1辺約0.65～0.7mの隅丸方形、断面形は方形を呈する。柱穴の平面形は楕円形・円形で、柱径は約0.2～0.6mである。

遺物はSP10の柱痕より土師器・須恵器・黒色土器、SP11の堀方より土師器がそれぞれ細片で出土した。

柵2（SP04・15・41・64・81）

調査区南北軸の中央に位置する地点で検出した東西方向の柱穴列である。検出した柱穴数は5基で、柱間隔は西から2.2m、4.4m（間に攪乱あり）、1.2m、2.1mである。それぞれ堀方の平面形は1辺約0.4～0.5mないし1辺約0.7mの隅丸方形で、断面形は逆台形・方形を呈する。柱穴の平面形は円形で、柱径は約0.2～0.5mである。

遺物はSP04の柱抜き取り痕より土師器、SP15の堀方より土師器・黒色土器、SP41の堀方より土師器、SP64の柱痕より土師器、SP81の柱痕より土師器がそれぞれ細片で出土した。

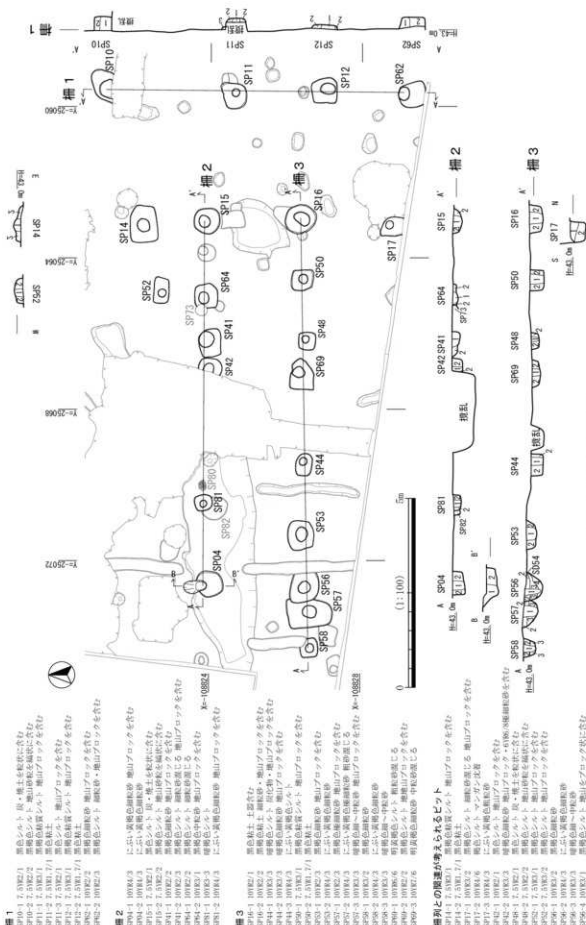


图4 栅列平·断面图

柵 3 (SP16・44・50・53・57・58・69)

調査区南部で検出した東西方向の柱穴列である。検出した柱穴数は7基で、南側にわずかに振れており、柱間隔は西から1.0m、2.1m、2.0m、2.5m、2.5m、1.7mである。堀方の平面形は1辺約0.5～0.8mないし約1.2×0.8mの隅丸方形、断面形は方形・U字形を呈する。

遺物はSP16の柱痕より土師器・黒色土器、堀方より土師器、SP44の柱痕より土師器・須恵器・瓦、堀方より土師器、SP50の堀方より土師器、SP53の柱痕より土師器・須恵器、堀方より土師器、SP57の堀方より土師器・瓦、SP69の柱痕より土師器・黒色土器、堀方より土師器がそれぞれ細片で出土した。

柵列との関連が考えられるビット (SP14・17・42・48・52・56)

それぞれ平面形が隅丸方形を呈し、規模は長辺が約0.5～0.7m、短辺が約0.3～0.5mを測るが、SP14については長辺約0.96m、短辺約0.71mと比較的大きな隅丸長方形を呈する。

遺物はSP14の柱痕より土師器・黒色土器、堀方より土師器、SP17の堀方より土師器、SP48の堀方より土師器、SP52の堀方より土師器・須恵器、SP56の堀方より土師器・須恵器・瓦が出土した。

井戸 (SE61)

調査区南東隅で検出した。調査区の関係で完掘はできなかったが、平面形は1辺約1.5mを測る隅丸方形、断面形はU字形を呈し、検出面からの深さは約1.3mを確認した。平面形や深さ等の規模、木製品の遺存状態が良好な点から井戸だと考えられるが、井戸枠は認められず、水溜めの可能性も考えられる。

遺物は土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・木簡・木製品・土馬・承和昌宝等がコンテナ2箱分出土した。

平安時代中期

土師器埋納遺構 (SP73・80)

調査区中央部、柵2のライン上で検出した。伏せた状態の土師器杯・皿を複数枚重ねて埋納したビットである。

SP73

柵2に属するSP64の堀方北西部分を切る。平面形は径約0.3mの円形で、断面形は深さ約0.15mのU字形を呈する。土師器は最上部に杯B2点を重ね、以下に杯A・皿14点を重ねた計16点が埋納されており、それぞれがほぼ完形で出土した。

SP80

柵2に属するSP81の東側で検出した。平面形は長辺約0.3m短辺約0.2mの楕円形で、断面形は深さ約0.1mのU字形を呈する。土師器は最上部に杯Aを2点、その直下に杯Bを2点、以下に杯A・皿を10点重ねた計14点が埋納されるが、土圧等により損壊が激しい状態であった。

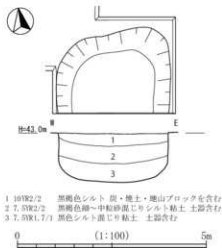


図5 SE61 平・断面図

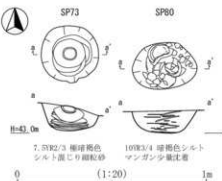


図6 土師器埋納遺構 平・断面図

表2 検出遺構一覧

No	平面形	断面形	検出規模 (cm)			出土遺物	備考
			長	短	深		
SD01	—	U字形	116.0	24.0	10.1		
SD02	—	皿形	284.5	196.4	25.2	土師器・須恵器・灰釉陶器・瓦	恵止利小路西薬地内溝
SD03	—	皿形	164.6	35.7	10.0		雨落溝
SP04	横円形	U字形	44.6	33.3	6.8	土師器・瓦	
SP05	円形	U字形	24.3	23.5	10.2	土師器	
SK06	不明	台形	75.5	48.7	13.4		
SP07	横円形	皿形	21.8	16.1	9.2		
SP08	横円形	皿形	24.1	23.6	5.8	土師器	
SP09	横円形	皿形	34.3	30.1	10.3	土師器	
SP10	隅丸方形	方形	78.2	51.5	30.1	土師器・須恵器・黒色土器	溝1
SP11	隅丸方形	方形	79.0	61.2	10.3	土師器	溝1
SP12	隅丸方形	方形	68.6	68.0	10.2		溝1
SP13	—	方形	—	—	19.1		北壁で断面のみ確認
SP14	隅丸方形	方形	96.4	71.0	19.1	土師器	溝関連か
SP15	横円形	皿形	68.7	68.7	24.2	土師器・黒色土器	溝2
SP16	円形	方形	83.6	76.9	35.2	土師器・須恵器・黒色土器	溝3
SP17	隅丸方形	方形	57.1	51.5	40.4		溝関連か
SP18	円形	U字形	34.2	28.7	65.4		
SP19	横円形	U字形	48.9	38.9	34.6		
SD20	—	皿形	192.4	36.2	55.4	石片	
SP21	円形	U字形	33.2	28.9	28.5	土師器	
SK22	横円形	皿形	144.8	140.3	21.5		
SK23	隅丸方形	皿形	60.4	45.7	15.6		
SP24	円形	U字形	46.4	47.6	35.4	土師器・須恵器	
SP25	円形	U字形	30.9	28.2	19.6		
SP26	横円形	台形	52.0	33.6	21.1	土師器・黒色土器	
SP27	横円形	皿形	76.5	38.0	12.1	土師器	
SP28	横円形	U字形	47.9	37.5	13.4		
SK29	不明	皿形	24.7	13.9	11.4		
SP30	不明	皿形	24.4	20.9	6.2		
SD31	—	台形	61.4	28.6	12.4	土師器	
SK32	不明	V字形	157.8	34.8	51.2		
SP33	円形	不明	33.2	32.7	—		
SK34	横円形	皿形	66.7	33.7	8.6		
SD35	—	台形	178.1	26.0	16.8	土師器・須恵器	
SP36	円形	U字形	38.0	29.6	34.2	土師器	
SP37	円形	皿形	44.6	26.9	9.5		
SP38	横円形	U字形	44.9	29.5	11.6		
SD39	—	U字形	93.7	31.4	18.5	土師器・緑釉陶器・瓦	
SD40	—	皿形	87.7	85.2	17.6		
SP41	隅丸方形	方形	75.1	59.0	18.0	土師器	溝2

SP42	隅丸方形	方形	63.4	35.8	28.6	土師器	梅間達か
SP43	円形	皿形	36.3	28.4	11.4	土師器・黒色土器	
SP44	隅丸方形	方形	59.7	44.1	20.4	土師器・須恵器・瓦	横 3
SD45	—	皿形	274.1	26.8	5.2		
SK46	—	皿形	566.0	190.6	5.4		
SP47	円形	U 字形	37.9	31.5	22.5	土師器・須恵器	
SP48	隅丸方形	方形	47.5	45.8	17.6	土師器	梅間達か
SP49	円形	不明	35.0	32.6	—		
SP50	隅丸方形	V 字形	58.4	54.8	22.6	土師器・瓦	横 3
SP51	円形	U 字形	27.4	21.5	20.3	土師器	
SP52	隅丸方形	U 字形	68.8	40.3	22.4	土師器・須恵器	梅間係か
SP53	隅丸方形	U 字形	76.4	70.8	28.6	土師器・須恵器	横 3
SD54	—	皿形	295.5	34.4	8.3	土師器・瓦器	
SD55	—	皿形	163.5	31.3	8.6	土師器・須恵器	
SP56	隅丸方形	方形	75.7	75.4	48.6	土師器・須恵器・瓦	梅間達か
SP57	隅丸方形	台形	120.7	71.5	34.6	土師器・黒色土器	横 3
SP58	隅丸方形	台形	50.5	47.7	33.4	土師器・瓦	横 3
SK59	隅丸方形	台形	55.7	49.4	34.6		
SP60	隅丸方形	皿形	55.1	30.3	12.4	土師器・須恵器	
SE61	横円形	U 字形	301.5	228.5	128.2	土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・木製品・木簡・土鳥・承和晶宝	
SP62	隅丸方形	方形	72.3	66.6	23.4		横 1
SP63	円形	U 字形	34.4	31.0	28.4	土師器	
SP64	隅丸方形	方形	65.4	61.5	10.5	土師器	横 2
SP65	円形	U 字形	30.5	25.0	12.7		
SP66	円形	皿形	36.5	33.4	10.4	土師器	
SP67	円形	U 字形	25.9	24.4	9.2	土師器	
SP68	横円形	U 字形	53.3	39.9	32.4	土師器・瓦	
SP69	隅丸方形	台形	82.9	63.3	22.4	土師器・黒色土器	横 3
SP70	横円形	皿形	48.9	44.3	5.6	須恵器	
SP71	円形	皿形	30.8	30.4	10.6	土師器	
SP72	円形	U 字形	32.6	31.6	10.7		
SP73	円形	U 字形	31.5	30.7	14.2	土師器	土師器埋納道構
SP74	円形	皿形	23.4	22.7	4.9		
SP75	横円形	皿形	34.0	35.3	15.3	土師器・須恵器	
SP76	円形	皿形	49.9	45.9	10.3	土師器・灰釉陶器	
SP77	横円形	皿形	31.6	31.7	8.7		
SP78	円形	U 字形	35.4	33.8	12.3	土師器・須恵器	
SP79	横円形	U 字形	38.6	34.4	81.5	土師器	
SP80	横円形	皿形	34.2	24.4	12.4	土師器	土師器埋納道構
SP81	隅丸方形	U 字形	48.1	43.4	20.5	土師器	
SP82	円形	皿形	66.1	61.2	8.6	土師器・緑釉陶器	

Ⅲ 遺物

平安時代の土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・木製品・木簡・土馬・承和昌宝や、中世以降の土器・陶磁器がコンテナ6箱分出土した。

なお SE61 以外の遺構では小破片のみが出土し、図化可能なものは少量であったため、主要な遺構の出土遺物のみを実測の対象とした。

恵止利小路西築地内溝出土遺物（図7-1・2）

恵止利小路西築地内溝出土遺物は、9世紀中頃に属する。

灰釉陶器（1） 1は碗である。口径15.6cm、底径7.7cm、器高5.0cmを測る。口縁部は外反し、体部は丸みを持つ。口縁部はヨコナデ、外面の底部・底面はナデを施し、内面は灰釉を施軸する。

瓦（2） 2は平瓦である。凹面は布目圧痕が残存するが、一部はナデ消される。端部は縦方向のナデを施す。凸面は6条/cmの縄目叩きを施し、側面はヘラ切りを行う。

柵列ビット出土遺物（図7-3～7）

柵列ビット出土遺物は、9世紀中頃に属する。

土師器（3～5） 3・4は杯である。それぞれ口縁端部を丸く収めて肥厚させるが、口縁部について3は内湾し、4はわずかに外反する。内面は残存部の範囲全てに時計回りのヨコナデ、外面はc手法を施す。5は甕の口縁部である。口縁端部は肥厚し、口縁部はヨコナデにより外反する。

須恵器（6） 6は蓋である。内外面に回転ナデを施す。

瓦（7） 7は平瓦である。凹面は布目圧痕が残存し、端部はヘラケズリを施す。凸面は3条/cmの縄目叩きを施し、側面はヘラ切りを行う。

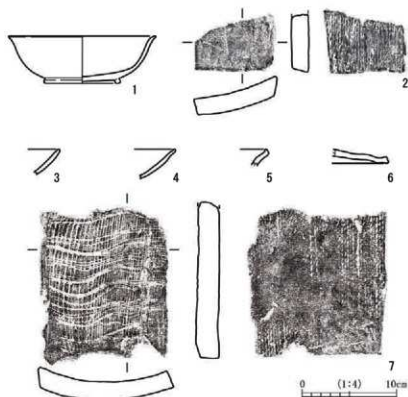


図7 恵止利小路西築地内溝・柵列ビット出土遺物

1・2:SD02, 3:SP50 壺方, 4:SP04 柱痕, 5:SP53 柱痕, 6:SP17 柱痕, 7:SP56 壺方

SE61 出土遺物 (図8～12)

土師器 (図8～8～30)

皿・杯 (8～21) 8～10は皿、11～16は杯A、17～21は杯Bである。いずれも9世紀中頃に属する。口縁部は全般的に時計回りのヨコナデを施すが、暗文が施される8のみ反時計回りである。外面はc手法・e手法が混在するが、c手法のヘラケズリは粗く施される。

皿 8は口径17.9cm、器高2.5cmを測る。口縁部は直線的で、端部は丸く収める。口縁部は二段ナデ、見込みは外螺旋状暗文、外面はe手法を施す。調整や暗文について他の出土例と様相を異にするが、藤井寺市はさみ山遺跡82-27区に類例の出土が認められることから、河内地域からの搬入品と考えられる(大阪府1983)。9は口径13.8cm、器高1.8cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く収める。口縁部はヨコナデ、見込みは一方方向ナデ、外面はe手法を施す。10は「上」の墨書が認められる底部片である。外面調整にヘラケズリを施す。

杯A 11は口径13.4cm、器高3.2cmを測る。口縁部は直線的で端部は外反し、内面はわずかに内傾する。口縁部はヨコナデ、見込みは一方方向ナデ、外面はe手法を施す。内外面の全体に煤が付着する。12は口径13.5cm、器高2.9cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く収めてわずかに肥厚する。口縁部はヨコナデ、外面はe手法である。内面は「2」字状ナデ上げに類似したナデ痕が見られる。13は口径14.6cm、器高3.6cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く収めて肥厚する。口縁部はヨコナデ、見込みはナデ、外面はe手法を施す。14は口径15.9cm、器高3.4cmを測る。口縁部はヨコナデにより内外面ともに窪みができる。端部は丸く収めて肥厚する。口縁部はヨコナデ、見込みは一方方向ナデ、外面はe手法を施す。内外面全面に煤が付着する。15は口径15.6cm、器高3.6cmを測る。口縁部は外反し、端部は肥厚する。口縁部はヨコナデ、見込みはナデ、外面はc手法を施すが、ヘラケズリ痕をナデ消す。16は口径16.0cm、器高3.7cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く収めて肥厚する。口縁部はヨコナデ、内面はナデ、外面はc手法を施す。

杯B 17は口径13.6cm、底径7.5cm、器高3.0cmを測る。口縁部は直線的で、端部は丸く収めて内面はわずかに内傾する。口縁部はヨコナデ、見込みは一方方向ナデ、外面はe手法を施す。18は口径17.9cm、底径8.0cm、器高3.7cmを測る。口縁部は内湾し、端部は丸く収めて肥厚する。口縁部はヨコナデ、見込みは一方方向ナデ、外面はc手法を施すが、ヘラケズリ痕をナデ消す。19は口径18cm、底径9.0cm、器高4.8cmを測る。口縁部は直線的で、端部は丸く収めて肥厚する。口縁部はヨコナデ、見込みは7条/cmのハケ、外面はc手法を施す。20は口径19.8cm、底径9.2cm、器高5.0cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く収めて肥厚する。口縁部はヨコナデ、見込みはナデ、外面はc手法を施すが、ヘラケズリ痕をナデ消す。21は口径20.6cm、底径7.8cm、器高6.3cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く収めて肥厚する。口縁部はヨコナデ、見込みはナデ、外面はc手法を施すが、ヘラケズリ痕をナデ消す。

甕 (22・24～28) 22は小型甕である。口径13.1cm、残存高8.9cmを測る。口縁部は外反し、端部外面に平坦面を作る。体部は丸みを持つ。口縁部はヨコナデ、内面はナデを施す。外面全面に煤が付着する。24は口径14.9cm、残存高6.0cmを測る。口縁部・体部は直線的で、口縁端部内面は肥厚し、外面は平坦面を作る。口縁端部と外面にヨコナデ、口縁部内面及び体部外面は3条/cmのハケを施す。体部内外面に煤が付着する。25は口径23.2cm、残存高6.7cmを測る。口

緑部・体部は直線的で、端部は丸く収めて肥厚する。口縁部はヨコナデ、体部内面は10条/cm、外面は5条/cmのハケを施す。26は口径23.0cm、残存高9.3cmを測る。口縁部は受口状を呈し直線的で、口縁端部の内面は肥厚し、外面は平坦面を作る。口縁部はヨコナデ、体部内面はユビオサエ後ナデ、外面は6条/cmのハケを施す。27は口径25.8cm、残存高6.3cmを測る。口縁部・体部は直線的で口縁端部は丸みを持ち、受口状を呈する。口縁部はヨコナデ、体部内面はナデ、外面は3条/cmの粗いハケを施す。28は口径28.0cm、残存高6.3cmを測る。口縁部・体部は直線的で、端部は肥厚し外面に沈線施す。口縁部はヨコナデ、体部外面は3条/cmのハケを施す。**台付鉢(23)** 23は鉢の底部と脚台部で底径19.1cm、残存高7.0cmを測る。脚台部の内外面には5条/cmのハケを施す。鉢部の外面には煤が付着する。

高杯(29・30) 29は杯部で、口径27.0cm、残存高3.0cmを測る。口縁部は直線的で端部は丸く収めて肥厚する。口縁端部はヨコナデ、口縁部内面はナデ、外面は下から上方向のヘラケズリを施す。内面に墨書が認められ、その内容は記号もしくは略押の可能性はあるが、未詳である。墨書上に煤が付着し、また灯芯痕が認められる事から灯明器としての使用がうかがえる。30は脚台部で、残存高19.7cmを測る。下から上方向のヘラケズリによる7面の面取りを施す。内面はナデを施す。

緑釉陶器(図9-31~36)

緑釉陶器はいずれも9世紀中頃に属する。

碗(31~33・36) 31は円盤状高台である。底径6.0cm、残存高1.3cmを測る。緑釉の色調は深緑色を呈し、底部外面を含めた全面に施釉する。胎土は硬質で、色調はオリーブ灰色を呈する。底面には「X」状のヘラ記号が施される。32は円盤状高台の底部から体部である。底径6.2cm、残存高2.6cmを測る。体部の立ち上がりは内湾し、底部外面に反時計回りの回転ヘラ削りを施す。緑釉の色調は淡緑色を呈し、底面を除いた内外面に施釉する。胎土は軟質で、色調は灰白色を呈する。底面に煤が付着する他、「十」字状の墨書が認められる。33は貼付輪高台の底部~体部で、底径7.6cm、残存高2.6cmを測る。体部は外傾しながら丸みを持って立ち上がり、外面にヘラミガキを施す。緑釉は底面を含めた全面に施釉されるが、黒化している。胎土は軟質で、色調は黄灰色を呈する。36は口径18.0cm、底径7.0cm、器高4.4cmを測る。円盤状高台を持ち、体部は内湾しながら外傾し、口縁部は外反する。緑釉の色調は深緑色を呈し、全面に施釉する。胎土は軟質で、色調は灰色を呈する。

皿(34・35) 34は口径14.0cm、底径6.4cm、器高2.0cmを測る。円盤状高台を持ち、体部は外傾し、口縁部はわずかに外反する。内面~口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラミガキを施す。緑釉の色調は深緑色を呈し、底面を含めた全面に施釉する。胎土は軟質で、色調は灰白色を呈する。35は口径14.0cm、底径7.0cm、器高2.2cmを測る。円盤状高台を持ち、体部は内湾しながら外傾し、口縁部はわずかに外反する。内面~口縁部はヨコナデ、体部外面はヘラミガキを施す。緑釉の色調は深緑色を呈し、底面を含めた全面に施釉する。胎土は軟質で、灰白色を呈する。

灰釉陶器(図9-37~39)

灰釉陶器はいずれも9世紀中頃に属する。

皿(37・38) 37は底径6.0cm、残存高1.6cmを測る。体部は外傾する。外面は回転ナデを施し、内面は灰釉を施釉する。底面に人偏の文字である可能性が考えられる墨書が認められるが、未詳

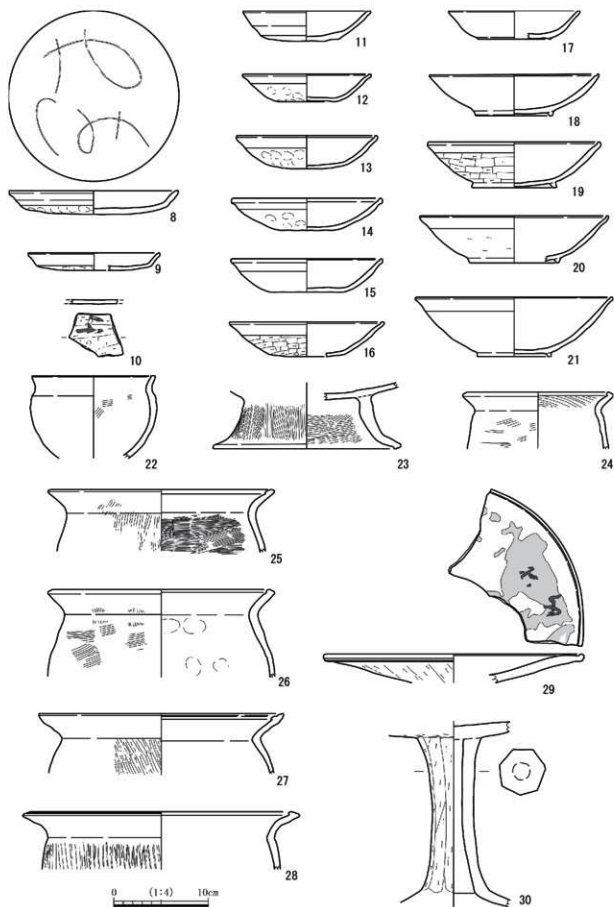


图8 SE61出土土師器

である。38は口径15.8cm、底径7.8cm、器高3.0cmを測る。外面に回転ナデを施し、底面は未調整である。内面全面に灰釉を施軸する。9世紀中頃に属する。

椀(39) 39は口径21.7cm、器高5.5cmを測る。外面に回転ナデを施し、内面全面に灰釉を施軸する。9世紀後半に属する。

黒色土器(図9-40～42)

椀(40) 40はA類で、底径7.0cm、残存高2.3cmを測る。内外全面の他、見込み・底部外面に一定方向のヘラミガキを施す。

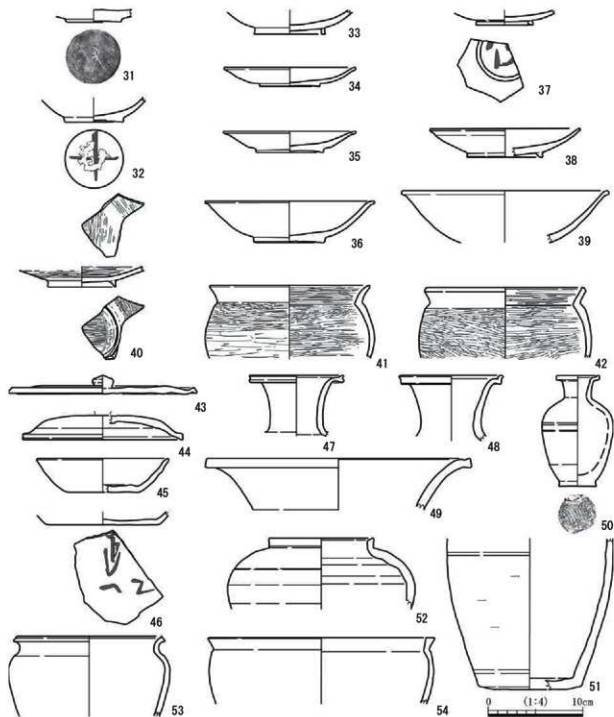


図9 SE61出土緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・須恵器

甕 (41・42) B 類の甕である。41 は口径 17.0cm、残存高 7.8cm を測る。口縁部は外反し端部は丸く収め、体部は丸みを持つ。口縁部内面はヨコナデ、外面はヘラミガキ、体部内外面はヘラミガキを施す。42 は口径 16.2cm、残存高 7.5cm を測る。口縁部・体部は直線的で、端部は肥厚する。口縁部内面はヨコナデ、外面はヘラミガキ、体部内外面はヘラミガキを施す。

須恵器 (図 9 - 43 ~ 54)

須恵器はその形態から 9 世紀前半～中頃に属する。

蓋 (43・44) 43 は口径 20cm、つまみ径 2.2cm、器高 2.0cm を測る。全面回転ナデを施す。内面全面に墨及び擦痕が認められることから転用破である。44 は口径 16.8cm、器高 2.5cm を測り、宝珠つまみを欠損する。頂部は時計回りの回転ヘラケズリ後回転ナデ、口縁部付近は回転ナデを施す。口縁部外面に煤が付着する。

杯 (45・46) 45 は口径 13.9cm、底径 7.4cm、器高 3.6cm を測る。体部は直線的で、口縁部は外反する。体部は時計回りの回転ヘラケズリ後回転ナデ、口縁部は回転ナデを施す。底部は未調整である。46 は底径 11.2cm、器高 1.4cm を測る。底部に「□□ [所カ]」の墨書が認められる。一文字目は「政」等が考えられるが、「文」の残画が確認できないため、未詳である。

瓶類 (47 ~ 51) 47 は口径 9.8cm、残存高 6.4cm を測る。口縁部外面に沈線、内外全面に回転ナデを施す。48 は口径 10.3cm、残存高 6.9cm を測る。口縁部は外反し、内面に窪みを作る。内外全面に回転ナデを施す。49 は口径 27.7cm、残存高 5.6cm を測る。口縁部は外反し、内面にくぼみを作る。50 は瓶子で、口径 4.4cm、底径 4.0cm、器高 11.7cm を測る。体部・頸部は直線的で、口縁部は外傾する。口縁端部内面に窪みを作る。内外面は回転ナデを施し、底面には静止糸切り痕と部分的にナデ消しが認められる。外面全面に自然釉が付着する。後述の木簡が内部に納められていた。51 は底径 8.0cm、残存高 16.0cm を測る。体部は直立気味に立ち上がる。内面は回転ナデ、外面は時計回りの回転ヘラケズリ後回転ナデ、底面はナデを施す。

壺 (52) 52 は有蓋短頸壺で、口径 15.0cm、残存高 8.5cm を測る。内外面に回転ナデを施す。

鉢 (53・54) 53 は口径 15.3cm、器高 8.5cm を測る。直立気味な体部に外反する口縁部を持つ。内外面に回転ナデを施す。外面全面に煤が付着する。54 は口径 23.9cm、残存高 7.0cm を測る。口縁部は厚く、端部に平坦面を作る。内外面に回転ナデを施す。

埴 (図 10 - 55) 55 は長辺 13.2cm、短辺 12.5cm、厚さ 3.5cm を測る。上面は格子状の線刻が引かれた後に、全面に三角状の突起を有する工具により叩きしめられており、下面もまた三角状の突起を有する敷物による圧痕が残る。下面の圧痕は内部に向かって斜め方向に凹みができており、上面を斜め方向から叩いた事によるものと見られる。

瓦 (図 10 - 56) 56 は玉縁式の丸瓦で、長さ 23.5cm、幅 9.3cm、厚さ 2.0cm を測る。凹面は布目圧痕・吊り紐痕が残存し、煤が付着する。凸面は縄目叩き痕をナデ消しする。

木簡 (図 11 - 57 ~ 58) 57 は長さ 9.8cm、幅 1.2cm、厚さ 0.5cm を測る。上端は意図的に削られ、下端は欠損が認められる。断面形状は半円形で、両側面と背面の樹皮は剥けている。墨書で「寛麻呂」と記される。樹種は広葉樹と見られる。58 は長さ 13.2cm、幅 1.0cm、厚さ 0.3cm を測る。上下の端部に切断痕が認められる。断面形状は方形で、両側面の樹皮は剥けている。墨書は表面に「口風相給」、「口風相給」、反対面に「寛多麻呂」、「歌人寛麻呂」と記される。断面形状は方形で、両側面の樹皮は剥けている。

木簡の墨書

58に記される「口風」は、大般涅槃經や大智度論等の經典に見られるが、「口から吹き出る風(息)」の意と考えられる。しかし木簡に書かれた他の文字の意味との関係性は不明である。

「歌人」が記された出土事例は、これまでに2例確認されている。1例目は平城宮宮城東南隅地区SD4100出土の削屑で「元雅楽寮歌人服解」と記される(奈文研 1996)。これは『令集解』職員令治部省雅楽寮条に見える「歌人四十人」の一員を指す。2例目は大阪府枚方市禁野本町遺跡SE6出土木簡(削屑)で、「歌人カ」とある(枚方市 2006)。報告によれば、SE6は奈良時代前半にはその大半が自然埋没したとされる。以上の2例はいずれも奈良時代のものである。

当遺跡や禁野本町遺跡出土例に見える「歌人」と、平城宮跡出土例からうかがえる雅楽寮の歌人との関係、また『日本書紀』に見える「百姓能歌男女」(天武四年(六七五)二月癸未(九日)条、「諸歌男・歌女・笛吹」(天武天皇十四年(六八五)九月戊午(十五日)条、「歌人」(朱鳥元年(六八六)正月己未(一八日)条)との関係は不明である。

これらの木簡は須恵器瓶子の中に納められていた事から、井戸に関するなんらかの儀式に使用された蓋然性が高いが、詳細は不明である。また同様の文字列を続けて記す点や、文字の端正さに欠ける点から、習書の可能性もある。今後の類例の増加に期待したい。

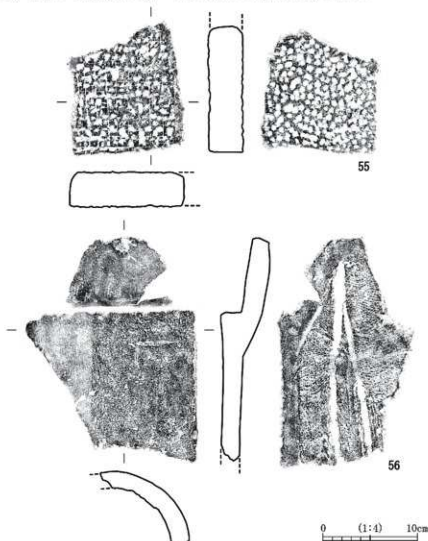


図10 SE61出土埴・瓦

木製品 (図 12 - 59 ~ 66)

紡錘車 (59) 59 は直径 7.2cm、厚さ 0.5cm、穿孔幅 0.5cm を測る。板材は柾目取りである。

曲物 (60) 60 は底板である。残存長 8.7cm、幅 2.8cm、厚さ 0.4cm を測る。板材は板目取りである。

不明木製品 (61・62・66) 61 は角材で、用途は不明である。長さ 8.4cm、幅 5.9cm、厚さ 3.0cm を測る。板材は板目取りである。62 は加工痕の見られる木材で、先端部は炭化する。長さ 21.2cm、幅 3.8cm、厚さ 2.0cm を測る。各所に平坦面を作る加工痕が見られる。66 は長さ 21.1cm、幅 13.8cm、厚さ 12.2cm を測る。各所に加工痕が見られるが、不明瞭である。

皿 (63) 63 は口径 20.0cm、底径 19.2cm、器高 1.7cm を測る。内面にはろくろ挽き痕が認められるが、外面に固定爪痕等は認められない。底部外縁に新による仕上げ痕が残る、口縁部にも工具痕が認められる。また内面には刃物傷が見られる。

下駄 (64) 64 は長さ 15.0cm、幅 6.5cm、厚さ 2.4cm を測る。板材は柾目取りである。その大きさから子ども用と考えられる。

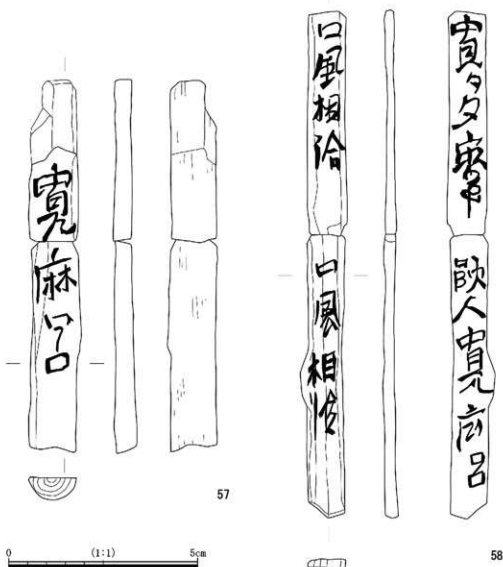


図 11 SE61 出土木簡

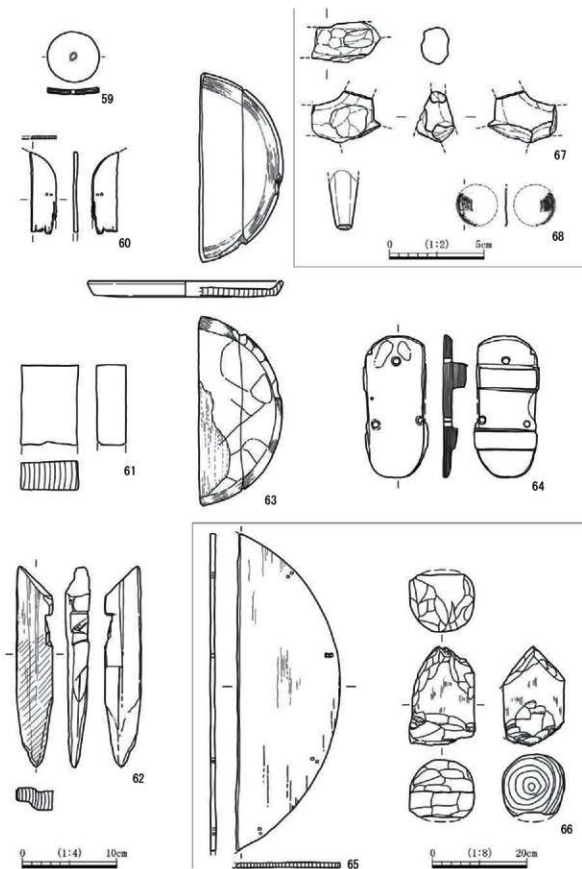


圖 12 SE61 出土木製品・土馬・承和昌宝

底板 (65) 65は曲物の底板で、長さ 67.2cm、幅 26.2cm、厚さ 1.0cm を測る。板材は板目取りで、穿孔部分に樹皮を結う。

その他の遺物 (図 12 - 67・68)

土馬 (67) 67は体部と脚部 1本が残存する。体部の残存長 2.7cm、幅 2.1cm、厚さ 2.0cm、脚部の残存高 3.1cm、厚さ 1.5cm を測る。体部は各所をユビオサエ・ナデで仕上げ、脚部は全面ナデで仕上げる。

承和昌宝 (68) 初鋳が承和 2 年 (835) の承和昌宝の破片である。径 2.2cm、厚さ 0.5mm、重さ 0.3g を測る。

土師器埋納遺構出土遺物 (図 13)

SP73・80 の 2 基から出土した遺物は全点土師器で、その器種は皿・杯である。

それぞれ小森・上村編年の京都Ⅲ古・平尾編年の 3A に該当するもので構成され、10 世紀前半の所産である。

共通する調整として口縁部に時計回りのヨコナデを行う他、外面調整に皿・杯 A は e 手法、杯 B に粗い c 手法を施す。しかし見込みは一方ナデ、または 5 条 /cm のハケを最終調整としており、内面の仕上げは一定でない。

色調は全般的に橙色を呈するが、SP73 の杯 B 2 点は明黄褐色である。

SP73 (69 ~ 84)

SP73 では 16 点の土師器が重ねて埋納されていた。器種の内訳は皿 13 点、杯 A 1 点・B 2 点である。

皿 (69 ~ 81) 69 は口径 13.6cm、器高 2.0cm を測る。口縁部は外反し、端部は丸く収めて肥厚する。見込みは一方ナデを施す。内外面の底部に煤が付着する。70 は口径 14.2cm、器高 1.8cm を測る。口縁部はわずかに外反し、端部はつまみ上げるようにヨコナデを施す。見込みはハケ後一方ナデを施す。内外面の口縁部に被熱痕が認められる。71 は口径 14.6cm、器高 1.8cm を測る。口縁部はわずかに外反し、端部はつまみ上げるようにヨコナデを施す。見込みはハケ後一方ナデを施す。内面に被熱痕が認められる。72 は口径 14.2cm、器高 1.9cm を測る。口縁部はわずかに外反し、端部はつまみ上げるようにヨコナデを施す。見込みはハケ後一方ナデを施す。口縁部内外面に煤が付着する。73 は口径 14.2cm、器高 2.0cm を測る。口縁部は外反し、端部は丸く収めてわずかに肥厚する。見込みはハケ後一方ナデを施す。口縁部外面に被熱痕が認められる。74 は口径 13.8cm、器高 2.0cm を測る。口縁部は外反するが端部は直立気味に立ち上がり、内面にわずかに窪みを作る。見込みは一方ナデを施す。内面に灯芯痕・煤の付着が認められる。75 は口径 14.0cm、器高 2.0cm を測る。口縁部は内湾し、端部は外面に窪みを作り丸く収める。見込みはハケを施す。口縁部内面に被熱痕が認められる。76 は口径 14.2cm、器高 2.1cm を測る。口縁部は外反し、端部は外面に窪みを作り丸く収める。見込みはハケ後一方ナデを施す。口縁部内面に被熱痕が認められる。77 は口径 14.4cm、器高 2.1cm を測る。口縁部は外反し、端部は外面に窪みを作り丸く収める。見込みはハケ後一方ナデを施す。口縁部内面に被熱痕が認められる。78 は口径 14.2cm、器高 2.1cm を測る。口縁部は外反し、端部はつまみ上げるようにヨコナデを施す。見込みはハケ後一方ナデを施す。口縁部内面に被熱痕が認められる。79 は口径 14.0cm、器高 2.2cm を測る。口縁部は直線的で、端部は丸く収めて内面に窪みを作る。見込みは一方ナデを施す。80 は口径 14.2cm、器高 2.0cm を測る。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く収める。

見込みはハケを施す。口縁部内外面に煤が付着する。81は口径14.6cm、器高1.9cmを測る。口縁部・端部は共に直線的である。調整は風化により不明である。内面に煤が付着する。

杯 (82～84) 82は口径12.8cm、器高3.0cmを測る。口縁部は直線的で、端部は丸く収めて内面はわずかに内傾する。見込みは一方方向ナデを施す。口縁部内外面に煤が付着する。83は口径16.4cm、底径9.0cm、器高3.5cmを測る。口縁部は外反し、端部は丸く収めて肥厚する。見込みは一方方向ナデを施す。84は口径16.4cm、底径9.0cm、器高3.3cmを測る。口縁部は外反し、端部は丸く収めて肥厚する。見込みは一方方向ナデを施す。

SP80 (85～98)

SP80では14点の土師器が重ねて埋納されていた。器種の内訳は皿1点、杯A11点・B2点である。

皿 (85) 85は口径14.4cm、器高1.7cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部は丸く収める。口縁部内外面にわずかに煤が付着する。内面は風化により調整不明である。

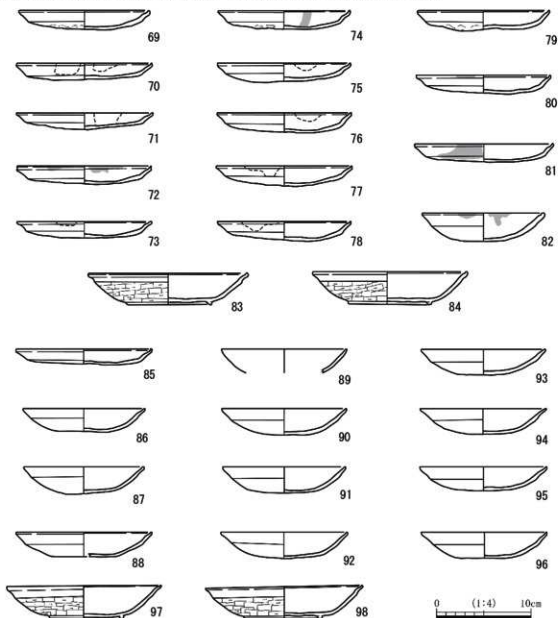


図13 土師器埋納遺構出土土師器

68～84：SP73、85～98：SP80

杯 (86 ~ 98) 86 は口径 12.8cm、器高 2.4cm を測る。口縁部は外反し、端部は丸く収める。見込みは一方向ナデを施す。87 は口径 12.6cm、器高 2.9cm を測る。口縁部は外反し、端部は丸く収めてわずかに肥厚する。見込みは一方向ナデを施す。88 は口径 14.4cm、器高 2.5cm を測る。口縁部は直線的で、端部はつまみ上げるようにヨコナデを施す。内面の調整は風化により不明である。89 は口径 13.2cm、残存高 2.5cm を測る。口縁部はわずかに内湾し、端部は丸く収める。全面風化により調整不明である。90 は口径 13.2cm、器高 2.8cm を測る。口縁部は外反し、端部は丸く収める。見込みは一方向ナデである。91 は口径 13.0cm、器高 2.6cm を測る。口縁部は外反し、端部は丸く収める。見込みは一方向ナデを施す。92 は口径 13.4cm、器高 2.6cm を測る。口縁部は直線的で、端部は丸く収める。内面の調整は風化により不明である。93 は口径 13.2cm、器高 2.7cm を測る。口縁部は外反し、端部は丸く収めて内面は内傾する。見込みは一方向ナデを施す。94 は口径 13.4cm、器高 2.7cm を測る。口縁部は外傾しながら外反する。端部は丸く収めて内面はわずかに内傾する。見込みは一方向ナデを施す。95 は口径 13.4cm、器高 2.5cm を測る。口縁部は外傾しながら外反し、端部はつまみ上げるようにヨコナデを施す。見込みは一方向ナデを施す。96 は口径 13.2cm、器高 2.7cm を測る。口縁部は外反し、端部は直立気味に立ち上がり丸く収める。口縁部内面はゆるやかに窪みを作る。見込みは一方向ナデを施す。97 は口径 16.4cm、底径 8.3cm、器高 3.5cm を測る。口縁部は外反し、端部は丸く収めて肥厚する。見込みはハケを施す。98 は口径 16.4cm、底径 8.3cm、器高 3.5cm を測る。口縁部は外反し、端部は丸く収めて肥厚する。見込みはハケ後一方向ナデを施す。

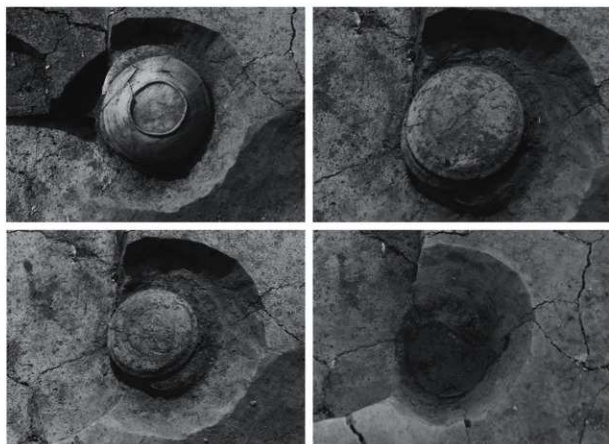


図 14 SP73 土師器出土状況

IV ま と め

平安時代前期

築地内溝や櫓列、井戸を検出した。それらの機能時期は9世紀前半～中頃と考えられる。

築地内溝と見られる SD02 は櫓列・井戸と同時期に機能していたと思われるが、内溝は出土遺物が極僅かであるため埋没時期が明確ではない。

調査地周辺の恵止利小路に係る調査成果では、右京二条三坊十五・十六町において当初の西側溝が平安時代前～中期に埋没する事が確認されており、更に時代が下る毎に東側へ移動する事が明らかになっている（京都市埋文研 2013・花園大学 1988）。また右京一条三坊十三町の調査では築地内溝が検出され、内溝から約4丈前後離れた位置に櫓・柱穴・土坑・井戸・溝等の多彩な遺構が見られたが、いずれの遺構群も中期を限って断絶し、後期に継続する遺構は見られない事が明らかになっている（京都市埋文研 1999）。これらの調査事例や本調査の遺構の時期から見て、本調査地における築地内溝も同様の流れを辿っている事が考えられる。

櫓列は南北方向の櫓列1、東西方向の櫓列2・3が検出されており、いずれも条坊に制限を受けた方位で作られている。しかしそれぞれが不均一な規模・平面形・柱間隔の柱穴によって構成されている点や、櫓列2・3の間隔が狭く2条が並立する事が考え難い点から、これらの櫓列は短期間の使用を目的とした一時的な目隠し塀であり、櫓列2・3のいずれかの廃絶後、短い期間で再度作り直されたものと考えられる。

井戸 SE61 は出土遺物の種類に富んでいる事から井戸自体が祭祀的な性格を有するとは考え難く、厨房を持つ建物が付近にあった事が考えられるが、出土した木簡とその類例から、雅楽寮に係る建物の可能性が考えられる。

須恵器瓶子に収められた木簡については、なんらかの儀式に使用された可能性もあるが、墨書や儀式の目的・内容については不明であるため、今後の類例の増加に期待したい。

以上の事から、調査地には9世紀前半に雅楽寮に関連する施設やそれに伴う厨房があり、饗宴等を行うための一時的なスペースや、目隠し塀があった事が考えられる。

平安時代中期

土師器埋納遺構2基は平安時代中期前葉に属する遺構と考えられる。切り合いから中期前葉の時点で櫓2は廃絶しており、埋納遺構2基やその他の比較的小規模なピットが櫓2のライン上に並ぶ点から、後世に再度櫓を作り直した可能性も考えられる。

埋納されている土師器は、SP73 出土例は被熱による変色や灯芯痕、煤の付着といった灯明器としての使用が認められるものが多いが、一方の SP80 ではそれらの痕が認められるものが1点のみである。これらの事から、埋納するために製作された土師器ではなく、また埋納以前の用途は一定ではないと言える。

また全般的には調整技法が一定ではないが、規格や調整がほぼ同様の杯Bを各2点ずつ納める点が共通しており、2基の遺構の関係性は深いものと考えられる。

土師器を伏せて埋納する例では、左京一条三坊の調査で検出された土壇230がある。この土壇は径約40cmの平面が円形を呈する土壇内に、11世紀代の土師器皿6枚を伏せた状態で埋納している。同調査では、土師器皿を2枚を合わせた状態や、6枚を正位置で重ねた状態で埋納した土壇が確認されているが、それらの意図は不明である（本弥 1989）。

本調査では住居跡が検出されていない事や、それぞれの検出位置が四行八門の町割りラインとは重なっていない事から、その用途は不明である。今後、類例の増加に期待したい。



版

1. 調査前風景
(西から)



2. 西部遺構検出状況
(西から)



3. 東部遺構検出状況
(東から)





1. 柵1検出状況（東から）



2. 柵2・3検出状況（東から）



1. SP15 検出状況（南から）



2. SP15 断面（北から）



3. SP16 検出状況（南から）



4. SP16 断面（南から）



5. SD02 検出状況（南から）



1. SP50 検出状況（南から）



2. SP50 断面（南から）



3. SP62 検出状況（北から）



4. SP62 断面（北から）



5. SP64・73 検出状況（北から）



6. SP80 土師器出土状況（北から）



7. SE61 検出状況（西から）



8. SE61 断面（北から）



1. 西部完掘状況
(西から)



2. 東部完掘状況
(東から)



3. 東端完掘状況
(東から)



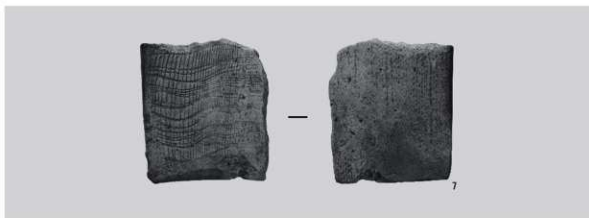
1. 北壁土層断面
(南から)



2. 西壁土層断面
(東から)



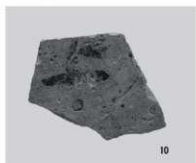
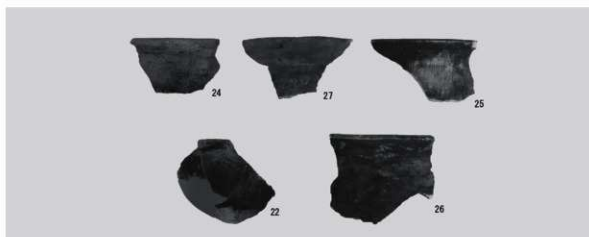
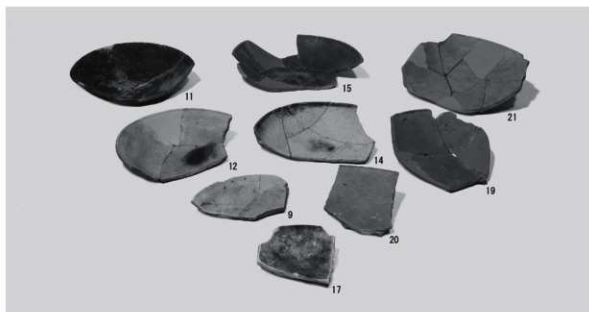
3. 西端拡張部
(北から)



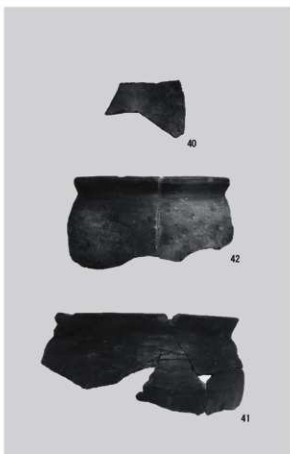
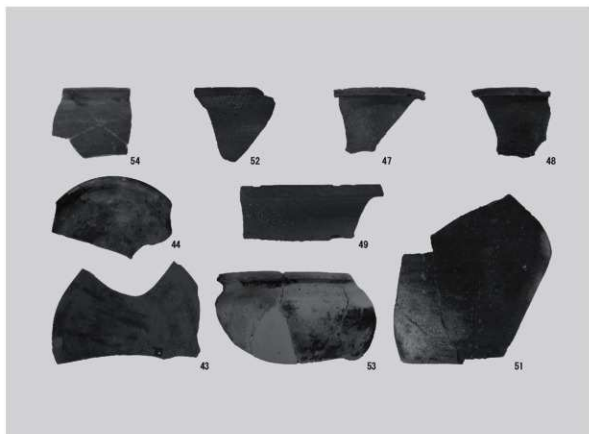
1. 灰釉陶器碗・2. 平瓦：SD02、3. 土師器杯：SP50、4. 土師器杯：SP04、5. 土師器甕：SP53
6. 須恵器蓋：SP17、7. 平瓦：SP56、56. 丸瓦：SE61



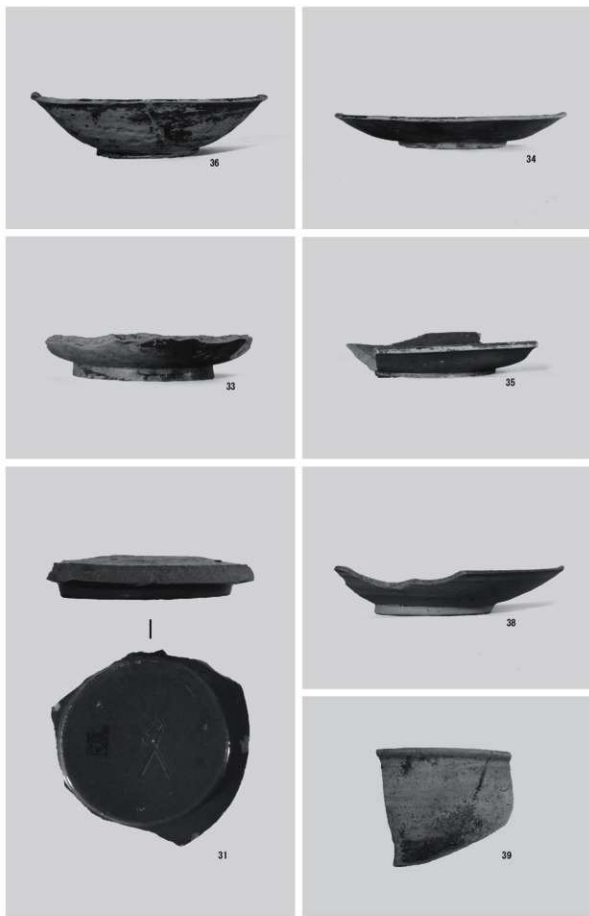
8. 皿、13・18 杯、23. 台付鉢、28 甕、30 高杯



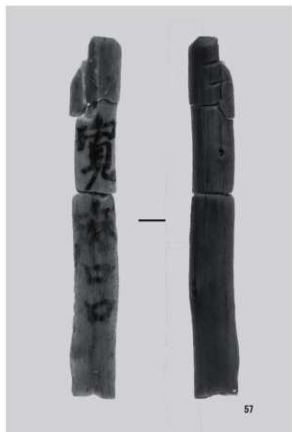
9. 土師器皿、11・12・14・15・17・19～21. 土師器杯、22・24～27. 土師器甕、10. 土師器皿・墨書「上」、29. 土師器高杯・墨書、32. 緑釉陶器碗・墨書「十」37. 灰釉陶器碗・墨書、46. 須恵器杯・墨書「政（カ）所（カ）」



40. 黒色土器椀、41・42. 黒色土器甕、43・44. 須恵器蓋、45. 須恵器杯、47～51. 須恵器瓶類、
52. 須恵器壺、53・54 須恵器鉢



31・33・36. 緑釉陶器碗、34・35. 緑釉陶器皿、38. 灰釉陶器皿、39. 灰釉陶器碗



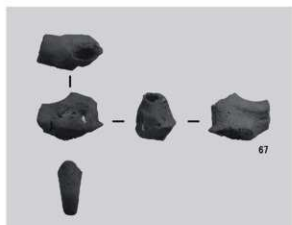
57



58



55

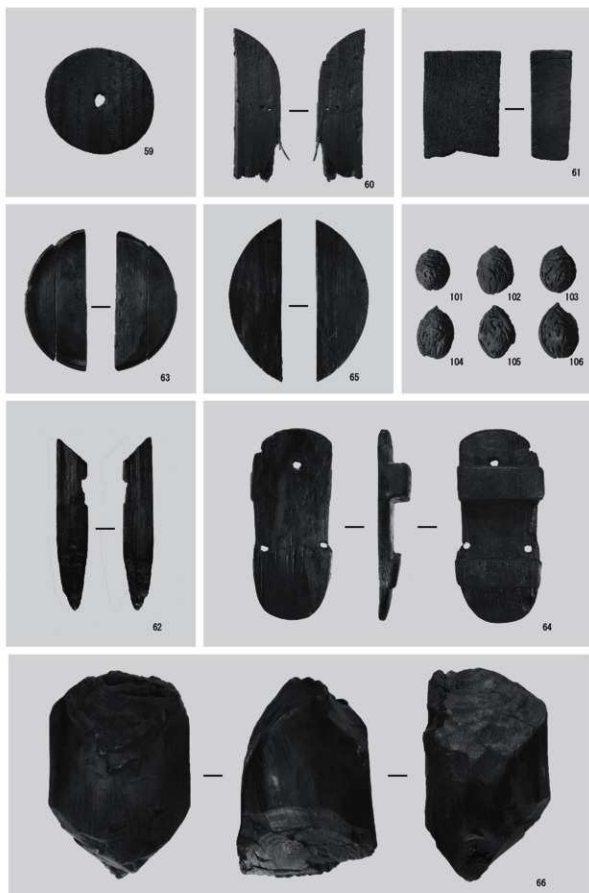


67



68

55. 埴、57. 木簡・墨書「寛麻呂」、58. 木簡・墨書「口風相給」・「口風相給」・「寛多麻呂」・「歌人寛麻呂」、67. 土馬、68. 承和昌宝



59. 紡錘車、60. 曲物、61・62・66. 不明木製品、63. 皿、64. 下駄、65. 曲物底板、101～106. 桃の種



69～81. 皿、82～84. 杯：SP73
85. 皿、86～98. 杯：SP80

報告書抄録

ふりがな	へいあんきょうきょういちじょうさんぼうじゅうさんちやうあと							
書名	平安京右京一条三坊十三町跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	影山美智与・江崎周二郎							
編集機関	株式会社 地域文化財研究所							
所在地	〒578-0941 大阪府東大阪市岩田町1丁目17番9号 TEL 072-968-7321							
発行年月日	令和7年(2025) 7月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうきょういちじょうさんぼうじゅうさんちやうあと 平安京右京一条三坊十三町跡	きょうとうしりやうきょう 京都市右京区 花園藪ノ下町 9番地	26100	1	35度 01分 7秒	135度 43分 31秒	令和4年 2月21日 ～3月17 日	約176.5 ㎡	マンシ ョン建設工 事
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京右京一条三坊十三町跡	都城	平安時代	溝 堀列 井戸 土坑	土師器・須恵器・黒 色土器・緑釉陶器・ 灰釉陶器・木製品・ 木簡・銭・土馬ほか		平安時代の恵止利小 路西築地内溝の他、 堀列、井戸、土師器 埋納遺構等を検出		

平安京右京一条三坊十三町跡

令和7年7月31日発行

編集・発行 株式会社 地域文化財研究所
〒578-0941 東大阪市岩田町1丁目17番9号
TEL 072-968-7321

印刷・製本 株式会社 地域文化財研究所

